

現場と大学をつなぐ国語科教科教育

田中大士・田中美帆・福田安典・山村亜希・持田玲

日本女子大学日本文学科では毎年「国語科教員の会」（以下「教員の会」）を開催している。これは本学出身で中学校、高等学校に奉職している卒業生と、教師になる希望を有して教職課程を履修している卒業生から構成されている。例年は二部仕立てにすることが多い。第一部では卒業生から基調報告者1名に報告をお願いし、その後に参加した卒業生が近況や実践などの報告を順次するものである。二部は懇親会として、コロナ禍前なら茶菓を用意し、卒業生と在学生の懇談の機会を設ける。在学生は経験豊富な先輩より直接指導やアドバイスをもらえるのである。もちろん大学教員も教科教育に関わってなくても参加する。この「教員の会」は以下の効果を持つ他では見られない良質な機能を有している。

一般的に国語科における三つの要素として、（１）知識及び技能の習得、（２）思考力、判断力、表現力等の育成、（３）学びに対する意欲、姿勢、態度が挙げられる。これは改訂された学習指導要領においても踏襲されている。しかしながらその内実を簡単に一本化はできない。大学における日本文学科の学修内容は上記三要素と親和性は高いとは言え、そのままではない。

（１）で言えば、近年の大学の講義や演習でもITの導入が常識的となり、知識と技能の修得は長足の進歩を遂げたが、コロナ禍で普及した教育現場におけるタブレット使用の実態とはズレが見られる。知識と技能を「何を知っているのか」「そしてその知識で何が出来るのか」という問いに置換してみれば、その「何」についての内実は大学、高校、中学校では違うだろうし、私学と公立でも違う。もちろん地域や学力差によっても違っている。その一本化して総括できない「何」について意見交換が出来る機会、それが本学科の場合は「教員の会」なのである。大学を卒業して久しい現場の先生方だけではなく、大学教員の側の意識にも大きな影響力を持っている。

（２）で言えば、思考力、判断力、表現力を「（１）で得た知識や技能をどのように使用するか」といった単純化が出来ると仮定しよう。われわれの人生は常に未知の人間と出会い、未知の書類にいきなり解説を求められる。そのような初対面の時に大きく関わるのが国語科教育である。それは「考察できる力」「読む力」「聞く力」「書く力」「伝え合う力」などと言い換えるのも可能で大学教育の演習科目や卒論ゼミでも修得可能と一見思われがちである。しかし、この力にはやはり経験則を伴う必要があろう。卒業生と在学生は基本的には日本文学科のその折々のカリキュラムポリシーに従った教育課程（カリキュラム）を受けている。つまりは共通する課程内容を履修しているのである。経験則を伴った（２）の力を確認することは相互のメリット効果になると思われる。

（３）で言えば、学びに対する意欲、姿勢、態度は、成績評価の基準として機能しているかに

見えるが、もう少し視野を広げて把握する必要があるであろう。国語科における学びに対しての意欲は、成績表に現れるだけで終結するものではない。平たく言えば、国語科教育で修得した学びへの意欲をどこまで維持発展させられるのかということである。寿命百歳時代を迎え、定年後の生き方を想定するに、もっとも安価で稔りの多いものは読書である。現在も定年後の過ごし方が社会問題化している。一日中テレビやネットを見るだけでは事足りない定年後の人たちは、読書の習慣の有無によってウエルネスやウエルビーイングが違う。ウエルネスやウエルビーイングは健康や健全という身体性を内包した幸福度であるが、そこには精神的な安定の要素が不可欠である。健康な身体を有した老後は、「やりがい」のあるものの用意を要請するものでもある。読書の習慣がなければ、それに代わるものを探すのは困難であることは明白であろう。そのために、中学までの義務教育機関はもちろん、進学率が高くなった高校までに読書の楽しみを学ぶ権利があると思われ、その領域を担うのは国語科教科教育である。国語科教育法における「学びに対する意欲」は単なる成績評価の基準ではなく、老後のウエルネス獲得のための伏線と位置づけられるはずである。そしてその価値をもっとも理解しているのが、大学で日本文学を学んだものたちである。

以上、国語科教科教育法における三要素は大学の日本文学科で学んだ内容とリンクするが、それを有機的に顕在化できるのは国語科教育法であることを述べた。そのために教員となった卒業生と在学学生は、「日本文学を学んだ」という共通基盤の上で成り立つ信頼関係を有するが故に、緊密な連繋を持つことが望ましい。その実践の場が本学科の「教員の会」である。

さて、国語科では学習指導要領の改訂が行われた。特に高校では大幅な改変である。その改訂に伴い、「学習指導案」の形式も変更を求められている。そのため各所で混乱が見られるが、現場はともかく特に教育実習希望生にとっては喫緊の課題となった。その状況を受けて日本女子大学教職課程委員会では『教育実習の手引き』を改訂した（第四版、2023年4月1日発行）。日本文学科も作成に関わっているが、その際にこの機会に卒業生に指導案例を作成してもらうこととなり、中学校は山村亜希、高校は田中美帆に依頼した。両者ともにすばらしい内容の指導案例を作成していただき、早速今年の実習生が利用している。「教員の会」の利点、共通するカリキュラムを履修した先輩が後輩に、自身の経験値を付与した指導案作成を伝授するという構図が成立したことは画期的であると思われるので、本稿でやや詳しく解説してみたい。

1 学習指導案

教育実習生にとって、学習指導案には本時の指導計画（単元名、単元目標、授業展開）を記す「略案」と単元の指導計画（「略案」に単元観、児童生徒観、教材観を付与したもの）を記す「細案」がある。しかしながら、学習指導案は作成する側の裁量が大きく、決まった型を定めにくい。そのためどうしても指導案例という指針を各大学で定めなければならない。

一般的に以下の要素が必要とされている。

- 1 実習生名
- 2 実習する学校名 学年 組 人数（男女比を書く場合もある）
- 3 授業場所、授業日・時限・指導教諭名（押印する場合がある）、実習生名（必ず押印）

- 4 教科名（自明のことではあるが、「国語科」は明記のこと）
- 5 单元名
- 6 单元の目標 文末が、教師の側から「～させる」、生徒の側に立ち「～できる」の2パターンがある。大学のシラバスやD Pの「～できる」とするものが近年増えているが、必ずしも学習者主体にのみ強制されるものではない。
- 7 評価規準 上記国語科教育の三要素、（１）知識及び技能の習得、（２）思考力、判断力、表現力等の育成、（３）学びに対する意欲、姿勢、態度
- 8 指導観は（１）单元（題材）観、（２）児童・生徒観、（３）教材観に分けて書く。教材・教具（タブレットなど）・資料を中心に、必要に応じてA L Tやゲストスピーカーの活用について具体的に記述する。安全管理や事故防止についても配慮すること。
- 5 单元（題材）の指導計画（全○時間）
- 6 本時（ 時間め／ 時間中）
 - （１）本時の目標 上の「5 单元（題材）の指導計画」と一致させながら、やや詳しく本時において身につけさせたい力を具体的に記述すること。上記国語科教育法三要素および評価基準のいずれに相当するかを考える。
 - （２）本時の展開 導入・展開・まとめ、3部分に分けること。展開については展開①、展開②など複数設定も可能だが、詰め込みすぎないように、50分の時間配分の中で考えること。

2 中学校における学習指導案例

山村亜希による学習指導案例は以下である。

【中学校 学習指導案例】

国語科

学習指導案

日 時 ○ 年 ○ 月 ○ 日 (○)
 ○校時 ○時○分 ～ ○時○分
 学校名 学校
 指導学級○年○組 ○ 名
 会 場 教室
 授業者○○ ○○ 印
 指導教諭○○ ○○

- 1 单元名 論理を捉えて「モアイは語る——地球の未来」安田善憲（光村図書出版）
- 2 单元の目標
 - ・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。〔知識及び技能〕

- ・文章の構成や論理の展開について考えることができる。〔思考力、判断、表現力等〕C読むこと
- ・わかりやすく伝わるように、文章の構成や展開を考えることができる。〔思考力、判断、表現力等〕B書くこと
- ・粘り強く論理の展開について考え、学習の見通しをもって筆者の主張に対する自分の考えを文章にまとめようとするすることができる。〔学びに向かう力、人間性等〕

3 評価規準

| ア 知識・技能 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|------------------------------------|--|--|
| ①意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。 | ①「読むこと」において、文章の構成や論理の展開について考えている。 ②「書くこと」においてわかりやすく伝わるように、文章の構成や展開を考えている。 | ①粘り強く論理の展開について考え、学習の見通しをもって筆者の主張に対する自分の考えを文章にまとめようとしている。 |

4 指導観

(1) 単元（題材）観

本単元の重点指導項目は、学習指導要領〔思考力、判断力、表現力等〕のC読むこと（1）オ「文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること」である。学年の目標としても「論理的に考える力」を養うことが挙げられている。総合（探究）学習を行う上でも論理的に考える力は不可欠であり、教科横断的に見てもとても重要な単元である。

(2) 児童・生徒観

第一学年で「新しい視点で」「筋道を立てて」、第二学年では「多様な視点から」という単元で説明的文章を学習しており、文章の展開を序論本論結論で分けることは定着しつつある。接続語も意識して読めるようになってきている。しかし、感覚で読んでしまう生徒が多いため、論理の展開を意識して読ませることに課題がある。

(3) 教材観

持続可能な社会について書かれた文章であり、総合（探究）として教科横断的に活用できる。文章も明確で展開もわかりやすく書かれており、語彙も比較的平易である。これまでに文章の構成や展開について学習し、説明文や評論文を読む素地はできている。論理的な思考には意見と根拠、具体と抽象などの結びつきが重要であることを学ばせることができ、第三学年に向けての橋渡しとしても適当な教材である。

5 単元（題材）の指導計画（全4時間）

| | |
|---|---|
| 時 | ○学習内容・学習活動 |
| 1 | ○段落ごとに分けられた文章を論理の展開に注目して正しく並べ替える。 |
| 2 | ○段落を序論・本論・結論に分け、文章の構成や論理の展開を吟味する。 |
| 3 | ○「武蔵野の風景」を読み、比べながら筆者の主張に関する自分の考えを200字で書く。 |
| 4 | ○200字を班で読みあい、推敲する。 |

6 本時（1時間め／4時間中）

（1）本時の目標

段落ごとに分けられた文章を論理の展開に注目して正しく並べ替えることができる。

（2）本時の展開

| 過程 | ○学習内容 | ◇指導上の留意点 | 評価規準・評価方法 |
|-----------|--|---|--|
| 導入 5分 | ・本時の学習の見通しとねらいを確認する。 | ・本時の見通しを持たせる。 ・既存の学習内容をペアで確認する。 | |
| 展開 40分 | ○4人で1班になり、段落ごとにランダムに切り分けられた教材を正しく並べ替える。 ・問いと答えが対応した展開になっていることに気づく。 ・具体と抽象がセットになっていることを理解する。 ○並べ替え終わった班は黒板に答えを記入する。 ○全班でそろったところでそれぞれの班の相違点と、その根拠を発表させる。 ○教科書を見て正解を確認させる。 | ○事前に20段落を20枚の短冊に分け、記号を振ったものを10班分用意しておく。 ・「なぜこの順番で並べているのか」という根拠をもって並び替えるように助言する。 ・黒板にはあらかじめそれぞれの班が書く場所を指定しておく。 ・それぞれの班の考えについて異論や反論を述べさせる。 ・どこが違ったかを確認し、納得できないところは挙手させ、全体で確認する。 | アー①意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。（話し合い活動） イー①「読むこと」において、文章の構成や論理の展開について考えている。（話し合い活動・発表） |
| まとめ 5分 | ・次回の授業で持続可能な社会についての別の文章を読み、自分の意見を200字でまとめることを予告する。 ・本時の振り返りを川柳でまとめる。 | ・次時の見通しを持たせる。 ・新たに学んだこと、改めて感じたことなどを5・7・5のかたちでまとめさせる。 | |

3 高校における学習指導案例

田中美帆による学習指導案例は以下である。ワークシートと生徒の感想、ループリックもあわせて掲載する。

【 高等学校 学習指導案例 】 国語 科 学習指導案

日 時 ○ 年 ○ 月 ○ 日 (○)

○校時 ○時○分 ～ ○時○分

学校名 学校

指導学級○年○組 ○ 名

会 場 ○年○組 教室

授業者○○ ○○ 印

指導教諭○○ ○○

1 単元名 山崎正和「水の東西」(三省堂)

2 単元の目標

- ・「水」にまつわる文化について、それぞれの特徴を理解することができる。
- ・文章の対比構造を理解し、筆者の主張を理解することができる。
- ・文中の例を元に、自分の経験に基づいた具体例を挙げ、文章で表現することができる。
- ・本文中の語句が持つ意味を正確に捉え、理解することができる。

3 評価規準

| ア 知識・技能 | イ 思考・判断・表現 | ウ 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|---|--|
| ①実社会に必要な語句や用法、表記の仕方などを表現することができる。 ②主張と論拠など情報と情報の関係について理解している。 ③比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方等について理解している。 | ①自分の考えが的確に伝わるよう、話の構成や展開を工夫する。 ②実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味し、伝えたいことを明確にする。 | ①グループワーク等で積極的に意見交換をすることができる。 ②単元振り返りシートを使用し、自らの意見を表現することができる。 |

4 指導観

(1) 単元（題材）観

本作品は高校生になって初期の段階で扱う評論である。文中に出てくる語句は難解なものではなく、高校生にとって理解しやすい。対比の関係をわかりやすく、筆者の体験等を踏まえたうえで書かれている随筆的「評論文」と言える。

また、文化論を扱うことで、多様な社会に目を向けるきっかけになると考える。

(2) 児童・生徒観

穏やかな生徒が多く、他者の意見に同意するなど話し合いは円滑に行うことができる。しかし、生徒の大多数は自分の意見を実社会で通用する適切な言葉で伝えることを不得手とする。また、筆者を初めとする他者の意見に批判的な姿勢を示すことを、躊躇している様子がある。

(3) 教材観

- ・東洋と西洋の文化において対比的なものをタブレットで検索し、身近なものや経験したことに当てはめる。
- ・グループになり、自分が住む地域と、他者が住む地域の比較を伝える。
- ・ALTから、海外の文化について聞く。

5 単元（題材）の指導計画（全6時間）

| 時 | ○学習内容・学習活動 |
|---|---|
| 1 | <ul style="list-style-type: none"> ・全文を音読する。 ・語彙について確認をする。 ・評論の文章構造について説明し、意味段落に分けるポイントを理解する（文頭の言葉、接続語、内容等）。 |
| 2 | <ul style="list-style-type: none"> ・各自で意味段落に分け、理由を記述する。 ・評論文の文章構造について考え、理解する。 ・他者と意見交換をし、考えをまとめ、結論まで導く。 |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> ・対比の関係をつかむ（「水」の楽しみ方の日本と欧米の違い）。 ・水と日本人の「心」の関係を、筆者の主張に基づき理解する。 |
| 4 | <ul style="list-style-type: none"> ・ALTから日本と海外の違いについて話を聞く。 ・ALTの話やタブレットで検索したことを元に「私の比較文化論」を書く。 |
| 5 | <ul style="list-style-type: none"> ・単元振り返りシートを用い、単元をまとめる。 |

6 本時（2時間め／5時間中）

(1) 本時の目標

- ① 評論文の文章構造について考えることができる。
- ② 語句に着目し、文と文の関係を考えることができる。

- ③ 自分の考えを、根拠を明確にして述べることができる。
- ④ 相手の考えを聞くことができる。
- ⑤ グループで議論することができる。

(2) 本時の展開

| 過程 | ○学習内容 | ◇指導上の留意点 | 評価規準・評価方法 |
|-----------|---|--|---|
| 導入 5分 | <ul style="list-style-type: none"> ・前回の内容をノートやテキストを見ながら確認する。 ・評論文が序論・本論・結論の三段落構成であることを確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な板書、もしくは口頭で確認する。 ・口頭で確認する際は、全員がノートを開いていることを確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・序論、本論、結論の役割について述べられる。(ウ、①) |
| 展開 40分 | <p>形式段落を意味段落にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自で、意味段落を考える。 ・根拠をノートに書く。 <p>意味段落を評論文の文章構造にあてはめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隣の人と意見交換をする。 ・グループになり意見を発表する。 ・「鹿おどし」「噴水」「水」「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」が本文中でどのような作用をもたらすか考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・一言でいいので根拠を必ず書かせる。 ・文章にできない生徒には、着目したワードをノートに書かせる。 ・双方の意見を伝え合う。互いの根拠を伝え、意見を精査させる。机間巡視で確認する。 ・板書の時間を確保することを保証し、発表に集中させる。 ・発表者が出ない(挙手がない)時は、こちらから数人指名する。 ・発表する人に「なぜそのように考えたのか」理由を説明させる。 ・論理的に説明できなくても途中であやふやな点があっても、文末までしっかり発語させる。その後、教員がフォローをする。 ・キーワードが出てこない時は助言する。 ・他者の意見を踏まえ、自分の意見を変えることができることを伝える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・根拠が文章で書かれている。(ア、①) ・根拠に妥当性がある。(ア、②) →ノートチェック ・文中の根拠をもとに意見を持てている。(ア、②) ・対比構造を捉え、内容のまとまりの変化に気づけている。(イ、①・ウ、①・ウ、③) ・発表者(グループの代表)になっている。(ウ、①) ・根拠に挙げた理由が明確になっている(イ、①) ・クラスメイトの顔を見ながら発表している。 |

| | | | |
|-------|---|---|---|
| | <p>他グループからでた意見を踏まえ序論・本論・結論を決めていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出てきた意見を踏まえもう一度、話し合う。 ・根拠を追加する。 ・出てきた意見を精査していく。 <p>・序論・本論・結論の段落を決定する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・教科書のどのページ、どの行に根拠となるものがあるのか確認させる。知っている知識ではなく、本文に基づく根拠を挙げさせる。 ・最後の決定は、教員がまとめる。生徒が出した意見をそのまま使う時は簡潔にまとめる。 ・板書量が多い時や、時間が足りなくなりそうな時は、決定的な根拠となるものを先に書かせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分のグループの意見と他グループの意見を比較することができる。 ・他グループの意見に批判的に意見することができる。 |
| まとめ5分 | <ul style="list-style-type: none"> ・出てきた意見と根拠を板書する。 ・次回、段落ごとに内容を読み進めることを予告する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・決めることだけが目的ではなく、根拠を挙げ、論理的に説明できることの大切さを確認する。 ・次回、本時で出てきた意見から、この文章ではどの語句がキーワードになるのか考えさせることを伝える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・目的について理解する。 |

高校一年生 現代の国語 「水の東西」「私の比較文化論」を音読

() (組) (番) ()

(1) 本文にならって、東の文化と西の文化で異なる具体例をいくつか挙げてみよう。

①

②

③

④

⑤

(2) で挙げた具体例について、その違いを箇条書きにしてみよう。

【東の文化】

【西の文化】

①

②

③

④

⑤

①

②

③

④

⑤

(3) グループで話し合い、(1) で挙げた具体例の中から一つ選び、その違いをまとめよう。

選んだ番号 ()

【東の文化】

【西の文化】

(4) 次の空欄にあてはめ、文章構成を考えてみよう。

(第一段落)

東の文化を代表する具体例として、私は

考えた。

その特徴は

である。

(第二段落)

また、西の文化を代表する具体例として、私は

考えた。

その特徴は

である。

(第三段落)

これらのことから、東西の文化についてまとめると

参考資料：「橋本昌雄総合教育センター」『教師のための 教材研究のひろば』

<http://www.toshitai-edu.ed.jp/michu/>

水の東西

著者 山崎 正和

概要

「鹿おとし」は、われわれに示れるものを感ぜさせる。しかし、外国では「噴水」が水の芸術として主流である。西洋と日本では、環境も違い、感じ方も違う。鹿おとしは、日本人の「形なきものを恐れない心」の表れであり、水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けであると言える。

重要語

愛嬌、徒勞、静寂、いやが上にも、いたるところ、壮大、林立、息ものむ、間隙、極致

学習日 一年 七月 三十日

出典 (教科書) 模範試験 過去問 演習

テーマ (哲学・思想 言語・文化 科学 近代 現代 その他)

賛成意見

「水を楽感するのにもはや水を見る必要さえない」という意見に賛成だ。私も筆者のように、「音の響き」を聞くという行為で水を楽しめると思うからだ。

反対意見

「町の広場はどことなく間が抜けて、表情に乏しい」という意見に反対だ。なぜなら、噴水のそばにはたくさん人があり、心安まっていたし、私もその中の一入だったからだ。

感想

今まで水の芸術についても考えたことはなかったし、国によって形や感じ方が違うこともあまり意識しなかったため、この話を讀むことで理解を深めることができた。

- ・各段落内容を正しく捉えることができた
- ・対比の構造を理解できた
- ・筆者の意見を正しくとらえられた
- ・異文化を知ることができた



水の東西

| | | 3 | 2 | 1 | 0 | 評価 |
|----------|---------------|---|--|--|---------------------------|----|
| 知識・技能 | 単元振り返りシート | 自らの経験に即した具体例を挙げることができる。文化圏によって生じた違いを論理的に思考し、表現することができる。 | 自らの経験に即した具体例を1つ以上挙げることができる。文化圏によって生じた違いについて思考することができる。 | 具体例は挙げられるが、ALTから聞いたものや、授業内で調べたもののみである。 | 具体例が挙げられない。 | |
| 思考・判断・表現 | 私の比較文化論ワークシート | 具体例を文章に当てはめ、書くことができる。主語述語が正しく使われた文章になっている。さらに、自分なりの考察が加えられている。 | 具体例を文章に当てはめ、書くことができる。主語述語が正しく使われた文章になっている。 | 具体例を文章構成に当てはめ、書くことができる。 | 具体例を文章構成に当てはめ、書くことができない。 | |
| 交流・表現・態度 | グループワークの取り組み | 自分の意見や考えを相手に伝えるよう、相手の反応を見ながら発表することができる。さらに、書いたものを要約したり補足したりして発信できる。 | 自分の意見や考えを相手に伝えるよう、相手の反応を見ながら発信することができる。 | 自分の意見や考えを、集団の前で話すことができる。 | 自分の意見や考えを、集団の前で話すことができない。 | |

総合評価

年 組 番 氏 名

4 2023年度 国語科教員の会

2023年8月5日（土）に国語科教員の会が開催された。多忙な時期であったにも拘わらず多くの卒業生に集まっていたいただき、教職をめざす学生や院生にメッセージと励ましを賜った。その参加者の一人、院生の持田玲による2023年度国語科教員の会の傍聴記は以下である。

講演会、懇談会では、本学科卒業生の先生方から、現場での教育活動の報告と私たち学生へのメッセージをいただいた。複数の先生から挙がったのが、探究学習や教科横断的な学習に関することだ。教員が一方的に教える授業から、生徒自身で考える授業作りへと変化していると実感した。更に、同じ環境で学んだ卒業生との交流を通して、教職に就くというだけでなく、日本文学科での学びを教員としてどのように生かせるか考えることができた。

現場の先生方から直接お話を伺える、大変貴重な時間となった。

持田が最後に述べるように、現場の先生方と、教職を希望する大学生・院生が直接に対話や情報交換ができる国語科教員の会は貴重である。

5 まとめ

本稿では、「現場と大学をつなぐ国語科教科教育」として、日本女子大学日本文学科で主催する「国語科教員の会」活動を通して、卒業生が後輩の在学生のために作成してくれた指導案を紹介した。今後は本論文を大学教育である「国語科教育法」受講者に配付し、教材として活用する方針である。関係各位に感謝したい。